

様なもくさいの匂はきつう鼻を打つた——くさむらには依然として虫の音が寂しさを告げて居る。

名月の感

中二 北島 江楓

三句に餘る暑中休暇に歸省して再び靈地の人となつた予は、故歸に離れた悲しさと靈地の秋の寂しさに感慨轉た無量である、折しも今宵は陰曆八月十五日光々と澄み渡つた月は普く人界を照して彼此の隔てがない、されど此の月を眺むる人の心は千萬萬別であらう。

月影のいたらぬ里はかけれども

眺むる人の心にそすむ

予亦今宵の月を見て塵ろに故郷を思ふの情いやまして愁然たらざるを得ない。されど春風秋雨六百七十餘年の其昔、海光さわやかき清澄山の春の曙に御開宗遊ばされてより武藏の野なる池上へ非滅現滅の涅槃に入り給ふまでの慘風悲雨の御生涯を憶びまつれば、今の我の餘りに意口地なきを嘆

かざるを得ない、と共に又聖祖が此の山に於ける九ヶ年の御生活の態を思ひ出さずには居られない而も其の聖祖が此の九ヶ年の清き静かな御生活に入りたまうまでの御心を拜想して轉たいひ知れぬ悲しさの念が湧くのである。そは波木井殿書に

如何にも今は叶ふまじき世あり國の恩を報せんが爲に國に留りて三度は諫むべし用ひずんば山林に身を隠せよといふ本文あり本より存知せり如何なる山中にも籠りて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事なし

私は此の御書を拜する毎に大きな溜息を聞かされる様な氣がする『如何にも今は叶ふまじき世あり』對他の生活はこれでやめやう、社會生活から逃れやう『如何なる山中にも籠りて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外他事なし』さうして内證の生活に籠らう、自己の心の中に住んで居たい、かくして九ヶ年の静寂なる生活が始まつたのである。然しちがら聖祖は國を愛するの念が深い盲ひたれば盲ひたるほど不憫さがいやますの

である、どうして超然として内證の喜びにのみ耽つて居られやう、幾度か國を思ひ煩ふ心は静かなる内證の奥殿を脅かした、さうして九ヶ年の生活に悲痛ある影をつくつた、此の九ヶ年に物せられた書翰や著述の中から、さうした影と光りが溶けあつた生活の響きを聞く事が出来る、死期を知つて山を下り池上に行かれた事も、其處で入滅の日までも立正安國論を講ぜられたのも、此の哀しい半面の事實を語るものでは無からうか、日昭上人に依つて叩かれた臨滅度の鐘の音は聖者を失ふ大衆の悲しみと、盲ひたる者を後に殘す聖者の悲しみとがもつれあつて今猶其の餘韻は流れて居る

あゝ吾等、六百年前時相隔たり月かはると雖も幸ひにも遇ひ難き聖祖の法流に浴し得たる喜びに吾が力の限りを盡して正法護持の爲に努力しなればならぬ。

人生僅か五十年七十古來稀あり、而も人は何事かの爲に死せざるを得ない、戦か、政治か、飢か病か、戀か、慾か、災難か、壽命か、何れにか死

ぬる命である、同じ捨つる命を教法の大義に捧げる世にこれ程の高い淨い行動があらうか。

散 步

中一 木村智徳

足の向ふまゝにぶら／＼と下町を下つて行く内につか總門前迄來た、午後からどんより曇つた空には灰色の雲が重なり同つて浮動しつゝある時々初秋の爽さを含んだ涼しい風が肌へをさすつて行く毎に四邊の木や草が淋しく揺られ、道側に咲いて居る薄や、刈草や、女郎草等の秋草が物哀れ赤秋の氣分を漂はせて居る。炎熱烈しかった盛夏はいつか過ぎて全く秋の天地とあつて居る事を急に感せずには居られぬ。遙の彼方には青い山々が幾重にも續いて、頂さにはぼんやりと白雲がかゝつて見える。あれ等も甲州一帯の連山かと思へば他所ならぬ感じがする、すぐ目の下は身延川を超えて梅平の田園が一面に展げられ、三四軒の農家が散在して居る様は繪のやうでもある。清い水が